

福竜丸だより



都立・第五福竜丸展示館ニュース

発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136-0081 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

「返還」時にふたつの対米密約があったことがほぼ確定になった、と報じた。これは朝日新聞記者が一九九六年二月にアメリカの情報公開法にもとづき資料請求したことに対して、約四年後の「このほど機密を解除していない文書が二つ存在すると回答してきたことによるもの。一つは「核通過密約」、もう一つは「自由出撃密約」だと思われる。詳しくは、当該新聞記事をご覧ください。

この「密約」のオリジンは一九六〇年の日米安保条約締結時にあるものであって、その後、必要な都度「再確認」してきたものだと思われる。当事者は岸首相と藤山外相である。

事前協議に関わっては、これまでも何回もこの疑惑が指摘されてきている。わたしは「密約」の存在は間違いないと確信しているもの一人である。このことにひきよせて、忘れてはならない国会での政府答弁が二つある。この際、あらためて今、この古証文を棚卸しすることは無駄ではあるまいと思う。

ひとつは「密約」は内閣を越えて有効だというものである。

「純粹に法理論として申し上げますと、いわゆる密約とおっしゃいますのは、結局、不公表といいますが、一般には知らせないで締結した取り決めとい

対米「密約」の存在と政府答弁

松尾 喬

うことだろうと思えますが、もし万が一、理論上の問題として両国のそれぞれの締約権限者が締結した取り決めは、仮にそれが不公表のものであっても、国際的にはそれはそのことだけをもって無効だと言うわけにはまいらないというふうにあります。

「仮にそういうことがありまして、不公表であるというだけをもって無効だとは言えない」というような事態になった場合には、それは国と国との間の取り決めでございしますから、その拘束を受けるのは国でございしますから、政府が交代しても、国が同一である限りはそれは効力は続くと言わざるを得ないと思えます。廃棄されない限りは。」

(一九七八年三月一四日参議院予算委員会会議録第十号)

(答弁者・真田秀夫「内閣法制局長官」)

もう一つは軍事機密に関わる場合は事前協議の有無を不公表にするというところである。

「事前協議の国会の報告につきましては、昭和四十七年五月二四日、衆議院において佐藤総理は、事柄によりましては事前に、あるいは多くの場合において事後、またはものによっては国会に報告しないものもある」と、こういうふうにご答弁しておられます。」

(一九八二年三月一日参議院予算委員会会議録第五号)

(答弁者・桜内義雄「外務大臣」)

「あえて一般論として申し上げれば、事前協議の事実が公表されることにより、米国の軍事機密が直接間接に明らかになり、わが国自身の安全保障にも重大な影響を与える場合等が特別の事由に該当する協議の事実を国会に報告しないことがあり得る。」

(一九八二年三月二四日参議院予算委員会会議録第五号)

(答弁者・栗山尚一「外務省条約局長」)

われわれ国民は、次のような立場に置かれていることを深く認識すべきなのである。

(1) 締結権限者の密約は内閣を越えて有効である。

(2) 核持ち込み(イントロダクション)は事前協議にかかると、核通過(トランジット)は事前協議にかからない。

(3) 事前協議は核の持ち込み、基地からの自由出撃、部隊の大規模な変更の三つの事項がかかることになっている。

(4) 事前協議はアメリカ側の発議によつてのみ開催されるが、その内容が米国の軍事機密にかかわる場合は、事前協議があつてもそのことは公表されない(国民には知らされない)。

これが現在の安保体制のシステムなのである。日本政府はこれまではっきりと、国会で答弁していることを深く認識すべきだと強く思う。(大阪経済法律大学アジア研究所名誉研究員)

「エンジン」で 記念講演

三月六日、協会主催の「三・一・ピキニ事件記念学習会」が東京・本郷の学士会分館で開かれました。広島・長崎・ピキニからとめどなく進んだ核兵器開発、拡散...核の世紀の体験と警告を新しい世代へ継承し、力を集め非核の二一世紀をきりひらくべき二〇〇〇年。第一の記念講演は川崎昭一郎会長の「アイニシユタインの夢」。第二の記念講演は村田正之氏の「日本の艦艇・商船・漁船の内燃機関技術の変遷と第五福竜丸エンジン」。戦前からエンジン一すじの道を歩んだ専門家としてエンジンへの熱い思いが語られ感銘を与えました。



3.1 ピキニ事件記念学習会

原爆搭載地・テニアン島を訪ねて

山本 英典

広島、長崎への原爆攻撃基地となったテニアン島を訪ねました。東京と神奈川の被爆者など一八人による「平和ツアー」です。

テニアンには、日本からの直行便はありません。成田からサイパン島まで約三時間半飛行で、連絡船で一時間一〇分です。

船から眺める島影は平坦で、一番高い山でも二〇〇m。この島がアメリカ軍の攻撃を受けたのは一九四四年七月。沖に一つの島ができたようだったほど大量の艦船と上陸用舟艇で攻撃した五万四千人の米軍は、九日間で全島を占領しました。戦死した日本軍兵士は八千人、サトウキビの栽培を主にしていた民間人は一万余。島内には、当時の砲弾跡や崩れた建物の方々に残っていました。

占領した米軍は、日本軍が三年かかってようやく一本の滑走路を

つくったのに、わずか三カ月で日本の滑走路をつくり、ここを日本本土空襲の出撃基地にしたのです。一九四五年三月の東京大空襲も、大阪、名古屋の焦土作戦も、ここから飛び立ったB29爆撃機によるものでした。

原爆搭載地には、石柱と木製の看板が立っていました。「ATO MIC BOMB P I T No. 1」。原爆搭載地です。広島に投下した原爆「リトルボーイ」をB29の弾倉に搭載したのです。コンクリートの枠が地面を四角に区切っていました。当時この枠内は、深さ一m余の深さに掘られていて、中にリトルボーイを入れて下から持ち上げるようにしてB29の弾倉に格納しようです。

いまは、枠内は土で埋められ、ヤシの木が一本と、ブーゲンビリアが赤い花を咲かせていました。私たちは、用意してきた千代紙の折り鶴を石碑と花木にささげ、原爆犠牲者の鎮魂と「ノーモアバクシャ」の誓いを新たにしました。

ここから五、六〇mぐらい南側に「P I T No. 2」がありました。長崎に投下された原爆「ファットマン」の搭載地点でした。ここにもコンクリートの枠が残され、ヤシの木が植えられていました。No. 1よりも少し大きいように感じました。

「リトルボーイ」は長さが三m、直径が〇・七m、重さ四tです。「ファットマン」は長さが三・二m、直径一・五m、重さが四・五tでした。原爆のこの大きさの違いが、枠組みの差になっているのではありません。

「この土を、亡くなった友人の墓に供えたい」「くりかえすまい原爆を」。それぞれの思いを込めて黙礼し、折り鶴をささげました。

私は、現場を見るまで、原爆搭載地が二カ所あることを知りませんでした。勉強不足だったことを、現場を踏んで確認しました。

テニアンを見た翌日、サイパンを見学しました。当時日本軍が使っていた大砲や戦車、弾痕など、戦後五十年たっても消えない戦争の傷跡は、生身の人間をいまだに苦しめ続けている原爆被害の傷跡と重なって、「NO MOR E WAR」「ノーモア ヒバクシャ」の思いを深くする旅となりました。

(東京都原爆被害者団体協議会)

核の流民となった私たちは、新たなミレニアムに故郷の島に帰る

マーシャル諸島共和国上院議員
アバッカ・アンジャイン・マディソン

三月二日、マーシャル諸島共和国から、アバッカ・アンジャイン・マディソン上院議員が第五福竜丸展示館を訪れた。マディソンさんは、三・一ビキニデー集会、日本原水協国際交流会、同全国集會等に参加のため来日されていた。展示館では、ジョン・ネルソン・アンジャインさんが何回も訪れた船を見つめ、ロンゲラップの被ばく者の写真の前に彼女も彼もこの子も死んだと声をこぼす姿をみせた。ロンゲラップの現状を語りつつ、ロンゲラップに残る教会に、核実験被害の記念館をつくりその中に彼等のいのちをよみがえらせた、など熱い思いを語った。以下は二月二十八日、静岡市で開催された三・一ビキニデー日本原水協国際交流会におけるマディソンさんの報告。

こんにちは、ロンゲラップの兄弟姉妹から、みなさんにごあいさつを申し上げます。

私が兄弟姉妹と言ったのは、私たちが共通の問題を抱えているからです。私たちは、核兵器を廃絶するという共通の目標を達成しようとして決意しています。それは、私達には生きる権利があるからなのです。

みなさんがよくご存知の私の父(ジェントン・アンジャイン)や叔父(ネルソン・アンジャイン)たちのように、今日、皆さんと一緒にすることができ、とても光栄に思います。故ジェントン・アンジャイン上院議員は、私の父ですが、愛情豊かで、とても謙虚な、そして、ロンゲラップ島民のために献身的に働いた人でした。娘の私を愛し導いてくれただけでなく、ロンゲラップ島民にとっても、進むべき道を示してくれた人でした。国際的にも国内的にも、ロンゲラップ島民とマーシャル諸島全体の発展に貢献し、太平洋地域においても、一定の影響を及ぼした人です。

私は、父の遺志を継ぎたいと思います。できるかどうかわかりませんが、やってみようと思っています。ロンゲラップ島民が、流民の生活を強



船の前に「夢」を語るマディソンさん

マーシャル諸島大学は、最近、核問題研究所を開設しました。この研究所の重要な目標は、自分たちの国の歴史を調査、研究できるように、マーシャル国民自身を訓練し、その問題について、マーシャル国民の視点に立った研究結果を出すことです。これまで長い間、マーシャル国民は、アメリカに核実験の被害について明らかにする活動を、外国に頼ってきた。今、私たちは、核実験の歴史と被害を明らかにするという仕事を、自分

いられても希望を失わずに、いつか、きついつか、汚染のない島で、島民が老いても若きも生活をとりもどし、満たされる日を実現するために、父がかかっていたいまつを引き継いでいこうと思えます。しかし、それは決して一夜では実現できない仕事なのです。

ロンゲラップ島民の努力がどのようになら進んでいるのか。それが、マーシャル諸島ばかりでなく国際的に、この世界的な問題をとりくむうえで、どのような役割を果たしているかについて、お話ししたいと思います。

世界の多くの人々、この会議に集まっておられる方々は言うまでもなく、一九五四年三月一日に起こった悲劇については知っています。それによつてどのような被害がもたらされたかを知っている人はわずかです。この悲劇の日をビキニデーと呼び、ブラボー実験で、広島型原爆の1000倍の破壊力をもつ水爆の実験が、ビキニ環礁を破壊したという事は知られています。そうです。ビキニ環礁は、ブラボー実験によつて、ひどく破壊され、蒸発した島もあります。環礁をとりまく環境はひどい放射能汚染をうけ、ビキニ島民は、いまだに故郷にもどることがで

たちの手で始めようとしています。ビキニデーの記念行事は、マーシャル諸島でも行われています。三月一日は国民の休日になっています。マーシャル政府は、ビキニ、エニウエトク、ロンゲラップ、ウトリックの島民、地域の人々と学生たちが集まり、マーシャル国民の生活にブラボー実験が何をもたらしたかについて、情報を交換しています。

先月、マーシャル議会は満場一致最後に、私の夢の話をさせてください。私の夢は、ロンゲラップ環礁に、ロンゲラップ島民のための核実験被害記念館をつくることです。二週間前の日曜日、二十五年ぶりに、私はロンゲラップに行きました。とても心が揺さぶられる一日でした。特に、島の中央に位置する教会を見たとき、私の胸はいついばいになりまし

きません。

しかし、ブラボー実験の被害を受けたのは、ビキニ島民だけではありませんでした。日本人々はこの日のことをよく知っています。ちょうどこの時、第五福竜丸の乗組員たちが、ビキニに近い水域で漁をしており、ブラボー実験の放射能にさらされたのでした。日本人々は、乗組員たちの放射能による病気をみて、放射能とその恐ろしい影響についてよく知っているため、マーシャル諸島で起こったことについても、国際社会に注意を喚起する役割を果たしてくれました。世界にブラボー実験のことを知らせるうえで、日本のみなさんが果たした役割は、マーシャル国民にとつて大きな助けとなりました。当時、マーシャルはアメリカの植民地下に置かれていたため、国民が核実験計画に対する反対の声を広げることが困難だったのです。

マーシャル諸島で核実験のゼロ地点として使用されたビキニ、エニウエトクの島民のみならず、マーシャル諸島全域が放射能の被害に遭いました。この中でも、ロンゲラップ島民は、最も高い放射能にさらされました。一九五四年三月一日、ビキニの実験場から最も近く、風下に位置するロンゲラップとアイリングナエの島民は、アメリカ政府がブラボー実験をしようとしていたことなど、全く知りませんでした。放射能が空気や風、海を通じて、ロンゲラップに運ばれ、島民は、放射性降下物である死の灰を浴びました。死の灰は、島民が頭につけていたヤシ油や皮膚に付着し、島民はひどいやけどを負いました。子供たちは、雪が降ってきたと思つて、それで遊んだり、食べたり、容器に集めたりしました。放射能は呼吸を通じて、島民の肺に入り、死の灰がついた食べ物を食べることに

で、核廃棄物を国内に持ち込み、貯蔵することを禁止する法案を可決したことを、喜びをもって報告します。マーシャル政府は、核兵器の使用による悲劇を直接体験した国として、核兵器は二度と使用されてはならないことを訴えました。日本の被曝者と同じように、私たちは、自分たちが経験した苦しみと死という痛ましい遺産を訴えて、世界の平和と核の不拡散、廃絶のため尽力しています。

中には何もありませんでしたが、私はそこでエネルギーを感じました。死んでしまった私たちの愛する者たちのことや、彼らの苦しむ姿が目には浮かんできました。私は突然ひらめきました。死んでいった者たちを生き返らせる方法があることを。ここに核実験被害の記念館をつくれれば、その中に彼らの命をよみがえらせることができる。このとき私は、ロンゲラップ島民のリーダーとして、そしてしもべとして、やるべき多くの計画に加えて、新たな使命があることを感じたのです。被害者とそ

よつて、体内に取り込まれました。ブラボー実験の後、島民が二日以上飲んでいただけの水も、放射能で汚染されていた。

アメリカ政府は実験から五十二年時間後になってやっとロンゲラップ島民を避難させたのですが、島民はその時、それから数十年も島に帰れなくなると思ひもしませんでした。ロンゲラップは現在も汚染がひどく、住むことができません。故郷の島での生活を否定されるという事は、島民にとつて、何を意味するのでしょうか。それは、私たちの生活様式、文化、マーシャル人としてのアイデンティティにとつて決定的に重要な環境と資源から切り離されることを意味します。ロンゲラップの多くの世代が、故郷の島を離れて育ってきた結果、島でとれる資源を使つてどのように生活していくのか方法がわからず、家族が所有している土地や権利についても何も知りません。

私たちの挑戦はとてつもないものですが、ひとつの共同体として、島民はともに自分たちの問題に取り組んでいます。私たちは再定住計画をすすめています。ロンゲラップ島の汚染除去が始められています。本島に島民が島に帰れるほど安全になるのかどうかは、誰にもわかりません。島民が避難先に暮らしている間も、島民が一体であるという強い絆を感じられるようにしなければなりません。そのために、彼らの要求やニーズを反映させた住環境の整備計画をすすめています。しかし、私たちに困窮するのは、死の灰という極度に高い放射能にさらされた被曝者や、汚染された島での生活によつて被曝した子供たちがかかえる複雑な健康問題にとりくむために必要な資源(人材・知識・資金)がないことです。

マーシャル諸島の議会、ニチジェラの一員として、私はマーシャル諸島の放射能の被害から生じる問題に、同僚の議員たちとともにとりくんでいます。アメリカ政府との交渉や、国際社会の支援を通して、よりよい医療サービスの提供、環境モニタリングの実施、マーシャル諸島の再生のために奮闘しています。私たちはまた、マーシャルの島民に、核実験の被害を受けたという独特な経験を教育するための努力も支持しています。

の子供たちが受けた不正義と苦しみゆえに、彼らのことは記憶にとどめられなければなりません。子供たちと、将来の世代のために、核のない世界を実現するため、団結してがんばりましょう。

この計画では、みなさんにご協力と援助をお願いしなければなりません。財政的援助、展示物など資料的な援助や、大きな励ましを必要としています。この夢を実現するため、みなさんのご協力をよろしくお願いがいたします。